成長志向を超えた持続可能な「情報システム」を考える

石丸 亜矢子（一般社団法人循環型経済研究所　代表理事）

このたび理事を拝命しました石丸です。私は新卒でシステム開発会社に入社して以来、情報システム開発やシステムコンサルティングに携わってまいりました。経営学系の大学教員を経て現在はシステムコンサルティング会社と一般社団法人を営んでおります。

情報システム学会が設立されたのは 2005 年ということで、2025 年には 20 周年を迎えますが、学会創設が企図されてから設立され、運営されてきた約 30 年の間に、「情報システム」という言葉の受け止められ方はずいぶんと変化したように感じます。

1995 年頃までの「情報システム」は、ごく一部の専門家だけが扱うもので、企業に導入されたメインフレームかワークステーションが主でした。家庭や個人が使える「情報システム」が広く普及したのは 2000 年前後で、一般家庭向けの最初のパソコン OS である Windows95 は 1995 年発売、Google の創設は 1998 年、初めてのカメラ付き携帯電話の発売と i モードサービス開始は 1999 年です。

ソフト面でも、パソコンの使途といえば当初はスタンドアロンでの文書作成やゲームやお絵描き程度だったものが、ホームページ閲覧や電子メールなど通信用途での使用が増えていき、ブロードバンドインターネットの普及に伴ってデータ通信を主とするものへと変化しました。半導体の小型化と高集積化により高性能な小型端末が手軽に入手可能となり、高速ネットワークとクラウドサービスが広く普及したことで、今ではローカルリソースに縛られないさまざまな自由な使い方ができるようになっています。

現在の「情報システム」は、もはや一部の専門家だけが扱うものではなく、誰でもアクセス可能で、空気や水や電気と並び称されるくらいに必要なインフラとなっています。

同時に、この約 30 年の間に変化したことはもう一つあります。特に日本において顕著ですが、経済成長に伴う少子化と既存人口の高齢化が経済に暗い影を落とし続けています。バブル経済の破綻以降、失われた 30 年といわれる経済の停滞と低成長はまさに人口オーナスによるもので、根本的な解決策はないまま今後も続いていくものと予想されます。

このような状況下で、情報システム産業は今後の経済を担える可能性のある、ほとんど唯一といってよいほどの期待を集めている分野ですが、ここ数年、そのトーンは変わってきているように感じます。以前は情報通信白書などでも「ICT の活用で新たな価値を創造し経済を飛躍的に成長させよう」といった論調だったものが、最近では、「少子高齢化と人口減少が止まらず災害なども増えているため、まずはインフラ補修などの足下の課題解決に ICT を活用していこう」という、より現実的な論調になってきているように思われます。

このことは、SDGs などで謳われている「持続可能性」の概念の普及と無関係ではないと考えています。脱炭素や気候変動対策を中心に持続可能な開発の実現を目指す SDGs に各国が取り組んでいます。

「持続可能性」は、あらゆる影響をできるだけ抑えて現状を長らえさせるという意味の語であり、「開発」とはさまざまな資源を活用して開拓し何かを作ることです。「経済」は、生産して流通させ消費する一連のシステムそのものを指します。そのため、「持続可能な開発」や「持続可能な経済」という言葉はそもそも矛盾を内在しているわけですが、「持続可能性」という言葉を経済界は、「持続可能にさせるための新たなシステムやプロセスを生み出すのだ」というように、都合よく使っている面があると感じます。

繰り返しの確認になりますが、「持続可能」にするためには、人間の活動をできるだけ抑え、あらゆる資源を消費しないようにすることが最適解なのです。極端なことをいえば、人間がいなくなり、呼吸も水の摂取も食糧の生産も消費も排泄も何もしなくなることが最も「持続可能」な状態です。

その意味でも、これからは生産や消費をできるだけ抑えて経済活動を小さくし、持続可能性を維持しつつ、余計な雑音を排して各自が心の中の声に耳を傾け、自分にとっての豊かさを追求するべき時代なのではないかと考えます。手間のかかることを代替できる、移動しなくてもできる、情報アクセスや、人や生物や人工物とのコミュニケーションを効率化できる、自分が考える代わりを担ってくれる。情報は知りたいと思えばもうそこにあり、創造を志せばそのプラットフォームやツールもそこにあります。成長志向の時代は終焉を迎え、ものがないことこそが逆に豊かである時代。そのような転換点、パラダイムシフトがすでに訪れているのではないでしょうか。これからの「情報システム」は、物質的な豊かさ獲得のためではなく、ないことの豊かさを生み出すためにあるべきではないかと考えます。

なお、誰でも使える身近な「情報システム」が普及し、便利になればなるほど、効果とその活用には賛否両論が噴出しています。人間がものを考えなくなる、サボるのはよくないなどマイナス面を並べ立て、道具があるにもかかわらず使わない・使わせないといった場面も見受けられます。大前提として、成長志向経済の限界が来ていることと、若い世代にとっての情報システムは水や空気や電気と同じような存在のインフラであることを考慮し、「情報システム」を積極的に活用し、その恩恵を享受していくべきではないかと考えています。

昨今、少子高齢化が進む中で、さまざまな学会で会員数が減少傾向になっているという話も聞かれますが、これからの時代の「情報システム」を考えるためには、多様な観点を持ち寄って議論することが必要です。

大学などに所属する研究者のみならず、産業界や学生など多様な方々に、ぜひ情報システム学会の会員になっていただき、ご一緒に研究できればと思います。